

## 伝達上の価値に関する一考察 — 外国語教育との関連において —

横 田 勉

### はじめに

文脈や脈絡などのコンテキストを前提にして意味を成立させるディスコースの主要な伝達機能として本稿では伝達上の価値につき考察する。ディスコースは言語表現を媒介として社会的レベルにおける言語行動を成立させる機能を果たす。したがって言語の伝達機能は言語使用（use）におけるディスコースを保証する役割を果たすといえよう。ディスコースが言語使用における意味を成立させるという伝達機能の中心的な役割を果たすという点に着目して、これを外国語教育の主要な教育目標とすることにつきその可能性を考察することも本稿の課題とした。

### I ディスコース

ディスコースとは「テキストの首尾一貫したダイナミックな伝達機能<sup>1)</sup>」であり、その根底には思考の自然な流れがある。ディスコースはこの流れに呼応した一種の価値機能である。思考の流れという意味では、ディスコースは言語活動の深部にある人間のディスコースであるということもいえる。<sup>2)</sup>

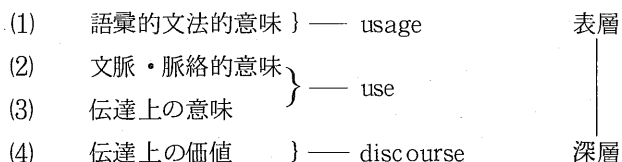
Thanks to God, I'm fine ✓ (1)

I'm fine, thanks to God ✓ (2)

文法上および言語表現上からは(1)も(2)も共に成立する。しかし人が瞬間的に発する喜しい気持（たとえば事故とか危険などから危うく逃がれたような場合に口にすることは「助かった！」などという発話）を表現するとき、実際の発話では(1)のほうが(2)より自然な表現である。このようにディスコースを含む言語表現が人間の思考活動そのものの表出であるという考え方の根底には、たとえばさまざまな人間社会の問題も人間から孤立して存在することはあり得ず、宙にただよって見つけれられるのを待っているような問題とみえても実は必ずある特定の人間のためにあるのだ<sup>3)</sup>というような言語観<sup>3)</sup>を据えることができる。

人間は自己を取り囲む環境の中で対象や現象を自己独自の概念化作用で表象化として把握する。対象や現象をあるがままに把握し表現するのではなく、概念として消化し、自己のディスコースに乗せて理解したり表出したりする。言語表現を指示対象の正確な説明だと仮定してさえも、受

容者が表出者と同一に指示対象を把握すると考えることはできない。表出者の意図した指示対象を受容者が自己の意図する指示対象として再構成し伝達行動を成立させるか否かが問題なのである。<sup>4)</sup> 個人のディスコース表象ともいえるこの概念化の作用はこの点で心理的・認知的な領域に深く係わる精神活動である。この精神活動は言語表現を媒介とし伝達上の意味を形成し、その意味に随伴した伝達上の価値が連続してディスコースを形成する。したがって言語表現による意味の伝達は次の4段階を経て成立すると考えられる。



(1)から(4)の各レベルは重層的に展開して1つのまとまった意味体系を形成する。言語行動はこの4段階すべての過程を経て成立する。この4段階の意味形成の過程を表出者と受容者という言語行動の役割関係からみると、受容者は自己に固有の表象として指示対象を把握しようとするのであって、そのつど表出者の言語表現に戻りその語彙的文法的意味に照らし合わせて指示対象を理解するのではない。すなわち受容者は自己の描く指示対象の表象を依り拠としてそれに照合して表出者の指示対象を把握するといふことができよう。<sup>5)</sup> しかし表出者の意図した指示対象と受容者の描く表象としての指示対象を結びつける(すなわち伝達効果を保証する)ものは何であろうか。さらに受容者に指示対象を描かせる役目を果たすものは何であろうか。これが説明できなければ、言語表現を媒介として成立するはずの〈伝達—理解〉という伝達行動を説明することはできない。

ディスコースを成立させるものは表象相互のつながりであるという見方<sup>6)</sup>や言語表現に認められる何らかの意味関係であるという見方<sup>7)</sup>がある。私見では以下に考察するように、ディスコースを成立させるものは表象や意味関係そのものではなく概念化作用により形成される概念的意味を基底として一種の価値概念が形成される。その価値概念の連続が伝達上の価値としてディスコースを成立させると考えられる。前掲の意味の4段階に則してディスコースとそれを成立させる価値概念形成につき次に考察する。

## II 文法機能の限界

例文を簡単なものに限らず語彙的文法的な機能とその限界につき考察し、それに代わるべき伝達上の価値というディスコースの本質を検討する。

I have a fountain pen.

I bought it at a store in the town. (4)

It is made in Korea. (5)

(4)および(5)における“it”は前方照応機能を持つ代名詞として(3)における“a fountain pen”を受ける。話題となっている命題としての万年筆に視点を置き(3)(4)(5)の全体を1つのまとまりのある内容文とすると、(3)の主題は“a fountain pen”であり、(4)はその取得場所、(5)はその製造場所をそれぞれ示している。また全体を行為者に視点を置き分析すると、(3)で所有、(4)で購入という行為、(5)で行為の場所がそれぞれ示されていることがわかる。以上を次のように整理し図示する。

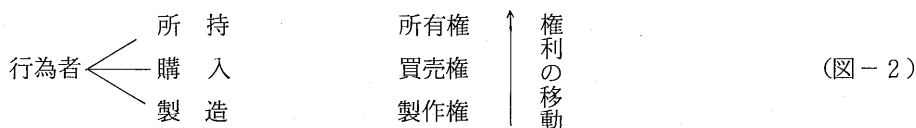
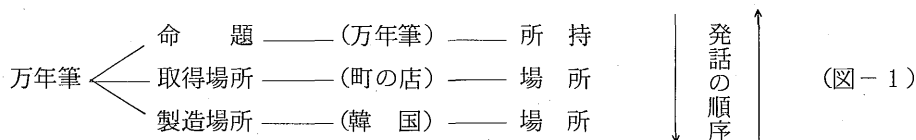
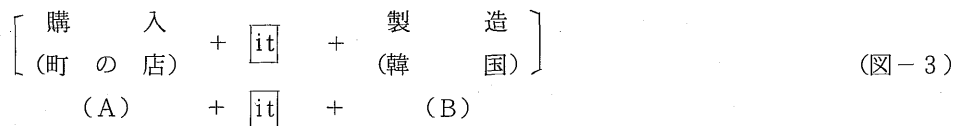


図-1では発話（記述）の順序は自由であり、その前後関係を規定する決定的な指標はない。これに反し図-2では矢印で示したような順序が自然な表出の流れとしてどちらか一方に規定されることがわかる。すなわち言語表現の順序は<(3)-(4)-(5)>の順序で行為が時間的経過に沿って<新-旧>の順序で述べられているが、権利の移動という視点からみると、これとは逆に<旧-新>へと移動していることがわかる。(3)(4)(5)の全体としての内容はこのような視点から分析できる。そしてこの一連の内容を言語表現上で保証しているのが“it”である。これを次のように図示する。



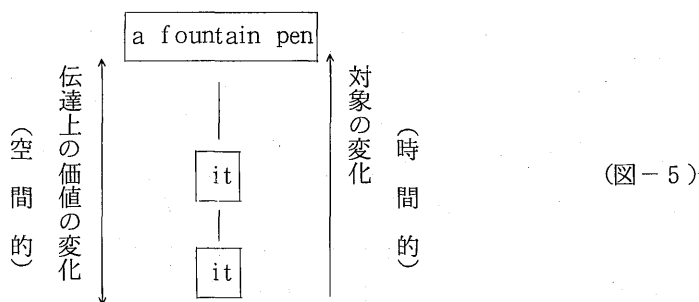
“it”は④と⑤との2つの類の内容を結びつけている。さらに④と⑤とは相互にその位置を交換しても伝達内容に変化はきたさない。すなわち次の形も成立する。



“ it ” の文法的機能は構造の面からみると確かにディスコースを成立させる役目を果たしていると言えそうである。しかし < a fountain pen = it > の図式は深層における次のような意味的関連性を説明することができない。

- (1) a fountain pen — a fountain pen in my possession
- (2) it — a fountain pen at a store
- (3) it — a fountain pen made in Korea

現在私が持っている万年筆と町の店先に並んでいた万年筆、さらに韓国で作られた万年筆はそれぞれみな別の価値と位置づけを与えられている万年筆である。物質的には同一であっても実質的、価値的にはそれぞれ別個の万年筆である。私を買った時点での万年筆は韓国で作られた時点、さらに町の店先に並べられた時点でそれぞれ変化している。万年筆という対象が時間と場所に応じて質的意味と価値が変化するということは、伝達上の意味と価値が必然的に変化することを伴う。これを次のように図示する。



“ it ” の文法的機能の説明だけでは以上のような深層の意味を説明しつくすことができない。この点に伝達効果と伝達上の価値を保証すべき何らかの指標が必要となる理由がある。

### Ⅲ 伝達上の価値とその変化

伝達上の価値は明示的な内容よりも暗示的な内容に係わるもので、したがって言語表現では明示されていなくても結果的にはそれと等価な内容を示す。ディスコース分析の立場からは(1)表出者の意図、(2)コンテキストおよび(3)受容者のコンテキスト共有の有無の3点にわけてこの「暗示的」内容を把握することが課題となる。表出者、受容者、コンテキストというそれぞれの要素は、伝達効果を期待してそれぞれの意味を表示する。意味を表示するというのは表出者だけではなく、受容者もコンテキストもそれぞれ独自の意味を持ち、その意味範囲の中で表出者の意味を理解すると考えられる。そしてそれぞれの意味には伝達上の価値が随伴しており、伝達行動を成立させ

る3要素（表出者、受容者、コンテキスト）の統合化を実現する原動力となる。伝達上の価値はそうした価値的要素の体系であり、言語使用を前提としてはじめて機能する。このことを次の例文で検討してみたい。

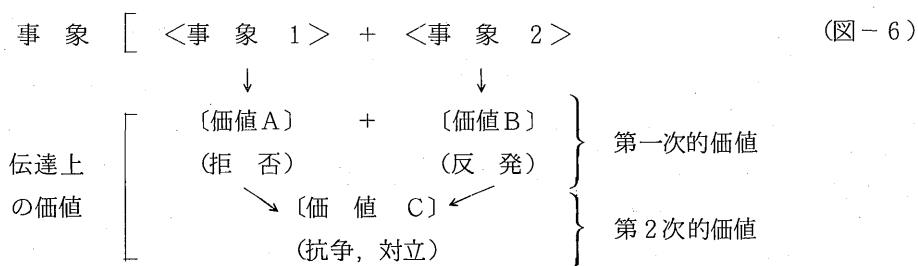
And I think it's wrong, because …… I never did that. And I'm never do that, because it's no, no part of my reality. And I think who's made me involved with the oddest different kind of music and musicians in America was the fact I have something they don't have. I deal with something they, it's from my country. But you know, I learn from him from the jazz musicians, you know. Because in my country, Brazil, we don't have improvised music, as developed the way it was developed in America. You know, we don't have that before — improvised music, instrumental music. I learned that from them. And I learned that from jazz; but I use my element my previous elements. And I think that was very important, you know. I never leave Brazil. Everything I do is, the root is Brazilian, it's half-Brazilian. And I think that is very important. — Interviewed by Kathy Sokol "The English Journal" 1988, 6月号 (6)

過去の「私」の姿を聞き手は頭に描くことができるであろうか。目の前にいるジャズ演奏家のナナ・バスコンセロスを見ながら、この音楽家が苦心して現在の地位と名誉を獲得するまでになった経過と生き方・音楽家（特に演奏家）として今後の活動に意欲を燃やすこの「私」が、話題の中で過去・現在・未来へと移るそのときどきの姿を聞き手は頭の中に具体的に現実の私から逆（8）に過去や未来へと描くことが可能であろうか。「私はこのようにしただけではありません」ということばを聞いて、聞き手は「このようにしなかったナナ・バスコンセロス」の過去の姿を頭に描くことはできないであろう。実体としての現在の私そのものではなく現在の私により伝達されるジャズ演奏家という特性が聞き手に了解され、その特性が言語表現の表わす表層の意味を離れ聞き手の脳裡に次々に描かれる。したがって聞き手の描くジャズ演奏家のナナ・バスコンセロス像は、あくまでも聞き手が既知の知識や生活経験などを通して了解しているジャズ演奏家とか音楽家などに関する独自のイメージの範囲内での個人的表象である。このような了解は対象を代表する特性を媒介として成立する。この表象作用による個人的なナナ・バスコンセロス像を中心として聞き手は過去の私や未来の私に関するこの演奏家を線条的次元で描くことができる。したがって聞き手はこの人物に特有の価値を見つけているのであり、自己の描いている表象に価値判断をくだしているといえる。ジャズ演奏家の姿ではなく、その姿に付随した一種の価値を価値意識または価値観という形で聞き手が独自に付与しその連続によりこの演奏家のあるべき姿を再構成してゆくといえよう。この伝達上の価値という概念は価値観とか価値意識などに伝達機能を付与することから導かれる。個々ばらばらな価値観や価値意識は言語行動に限らずあらゆるものに見い

出すことができるが、伝達行動における伝達上の価値は、個々ばらばらな価値が重層的に重なり合い、相互に関連しながら新たな価値を形成する点に特徴がある。そしてこの伝達上の価値はコンテキストの意味により言語表現の語彙的文法的意味が修正されるのに呼応して別の価値へと変化する。次の例文で伝達上の価値の変化につき検討してみたい。

President Ronald Reagan, criticizing a provision to guarantee warnings to workers of plant closings and layoffs, vetoed the omnibus trade bill Tuesday, and within four hours the Democratic — controlled House voted to override the veto by a 308-113 margin. — The Japan Times 1988, 5 — (6)

例文(6)において大統領の拒否権発動に対抗した議会の再可決という主要な2つの事象が生起順に説明されている。拒否権発動を事象1、議会の再可決を事象2.とすると両事象に付随している価値はそれぞれ異なっているが、両事象の連続による伝達上の価値はまた別の価値として伝達機能を果たす。これを次のように図示する。



ディスコースの伝達上の価値は上図からわかるように第1次的価値と第2次的価値に分けて考えることができる。そして事象や対象の数が増加するにつれ伝達上の価値も増加し重層的な価値体系を形成する。ディスコースの価値体系は第1次的価値を基底として第n次的価値までの連続する体系として考えることができよう。このことから言語を媒介とする伝達行動は最終的には表出者と受容者それぞれの対象認識についての価値体系であるということができる。

#### IV コンテキストと伝達上の価値

言語表現の第1次的意味はコンテキストにより修正されて伝達上の意味となることはすでに考察した。そこでここではコンテキストと伝達上の価値との関連をコンテキストの共有という視点から考察してみたい。次の例文で表出者と受容者が同一のコンテキストを共有している場合と共有していない場合にわけて、伝達上の価値の変化との関係を具体的に検討してみよう。

## HIGH TECHNOLOGY U. K. COMPANY

Having developed an extremely accurate dimensional copying system, wishes to expand and seeks capital in return for equity. An excellent opportunity for investment in rapidly expanding industrial market. Franchise of non-technical part of the system will be offered in future. Preferential consideration will be given to holders of equity, with opportunity to cover equity to franchise capital. High earnings potential.

(7)

例文で U. K. Company が一般に知名度が高く企業規模も大きくて業績も良い将来性ある会社であると仮定してみる。すると“expand”（拡張）と増資はこの会社の発展を約束するはずであり投資家は期待できると判断するであろう。したがってこの広告を見た投資家や持株制度を希望する人たちはこの会社の恩恵に浴したいという気持ちを抱くであろう。このようにこの会社に関する情報が読み手に共有されているとき、広告文の伝達効果は大いに期待でき言語表現の第1次的意味はそのまま伝達上の意味として機能する。そして読み手はこの広告文を媒介としてこの会社に肯定的な価値判断をくだすであろう。逆にこの会社が知名度も低く業績不振で将来性という点でも不安な要素が多分にあるとした場合、読み手は広告文を文字通りに解釈することはしないはずである。この会社に問い合わせたり、他からこの会社に関する情報を入手したりしてこの会社を自分なりに判断し、評価して結論を出すであろう。このようなことはこの会社の実状を知らない読み手の場合にもあてはまる。実状を知っている場合には広告文の実質的な伝達効果はないと言ってもよかろう。読み手の価値判断はこの場合、否定的なものとなるはずである。実状を知らない読み手の場合には評価が分かれば流動的である。このようにコンテキストを表出者と受容者がともに共有している場合と共有していない場合とでは伝達上の価値に大きな変化をきたすことがわかる。

例文(7)において第1節の状況には肯定的な評価を含む表現がみられる(“extremely accurate”)。この肯定的な評価は第2節および第3節にもみられる (“excellent opportunity”, “rapidly expanding”, “Preferential consideration”, “High earnings” など)。言語表現上からみればこうした肯定的な評価が多く含まれており、広告全体の伝達効果や評価も肯定的な意味をもつと受けとめられるかも知れないが、そのような受けとめ方はコンテキストが共有されている場合のみに限られる。さらにコンテキストに関しては会社の実状そのものがコンテキストであることは当然であるが、例文ではその他に会社をも含む社会的状況というコンテキストも含まれていることに注意したい。たとえば第1節の肯定的な表現 “extremely accurate” は “accurate” の語彙の意味が「正確さ」に関しては十分であることを示すのに、それが不十分であるととれるような表現と受けとれるかも知れない。しかしコピー機に関してはいまだ完全なものが製品化されておらずさらにコピーの程度の「完全さ、正確さ」ということが明確に説明できないという実状から判断すると、“extremely accurate” という表現がコンテキストを反映したものであると同時に、表出者で

ある広告主が伝達上の効果をねらった主観的表現であるといえよう。以上の考察からコンテキスト共有の有無はディスコースにおける伝達上の価値を特定するための基本的な条件であることがわかる。

## V 外国語教育への応用

コンテキストと伝達上の価値に関するいくつかの主要な点につき考察してきたが、ここでは外国語教育との関連においてコンテキストの重要性を中心にこうした問題を考察してみたい。

人は社会集団の成員として社会構造の中にその下位的要素の有機体として組み込まれている。この有機体はその機能を果たすためにとる行動のひとつが言語による伝達行動である。言語が社会的所産として行為のコミュニケーションという位置づけを与えられるのはこの理由による。したがって言語による伝達行動を把握するためには人間個人の意図とその意図を伝達するための方法および伝達を可能とする環境を理解しなければならない。いわゆる言語環境や上位に位置する社会的文化的状況、いわゆるコンテキストとの関連においてこの行為のコミュニケーション活動を把握することが課題となる。この点からは言語行動は人間が自己の置かれた社会構造の中で有意義に機能するための具体的な生き方の方略であるといえる。外国語教育においてはこの方略をディスコースという視点から分析し、最終的には人間のディスコースとしての思考活動と思考の型を解明し把握することを目標とする。ここではこのような視点に依る外国語教育を考えその理論的根拠を考察する。

言語行動を上述のように行動の視点から把握するのは別に、言語の視点から把握することも必要である。言語表現を媒介として伝達される伝達上の意味が言語行動を誘発する。この言語行動は言語表現のレベルから入り深層の第4段階レベル（Iで考察したディスコース）で実現するが、すでにみたように言語表現はコンテキストとの関連において言語行動を規定する重要な第1次的意味を担っていることがわかる。しかしながら外国語学習においてはコンテキストを優先しコンテキストの意味特定から言語表現の意味特定に移るという手順は検討の余地があると考えられる。コンテキストの解明の重要性について Brown and Yule (1983) は次のように述べている。

The discourse analyst working in the real world has to be able to extract, see as relevant, just those properties of the features of context which are relevant to the particular communicative act which he is describing, and which contribute to the interpretation (or intended meaning) of the utterance.<sup>10)</sup>

また Widdowson (1978) は語の同じ連続的な連がりがあっても co-text が違えばその文の「価値」は違ったものとなると述べている。また Brown and Yule (1983) もコンテキストに



関し次のように述べている。

ディスコースは類似したディスコースに関する過去の経験に照らして、またそれ以前の類似したテキストから類推により解釈される。相互に関連したそれ以前の経験はコンテキストを限定して解釈するという原則と関連して話し手 / 聞き手が一連の発話を同一の話題<sup>11)</sup>しようとするように仕向ける。

以上の諸説にみられるようなコンテキストやディスコース把握のための類推作用のとりえ方に特徴的なことは、言語表現との関連が不明確な点である。一般に母国語の学習者の場合には学習者は知識や生活経験を通して言語表現を無意識的に伝達上の意味に結びつけるような表現を選択することができる。しかし外国語学習においてはこのような無意識的な行動を学習者に期待することはまずできない。特に学習の初期段階においては困難であろう。したがって言語表現を手がかりとしコンテキストの意味を考え、両者の意味を比較・対照しながら最終的に伝達上の価値を把握して伝達行動を成立させようとする行動——発見的言語学習と行動——を行う。「ディスコースの活性化したコンテキストの1部分とするために話し手と聞き手はお互いに共有する知識を駆使してことばを理解しようとする<sup>12)</sup>」という状況を実現するためには、外国語教育のカリキュラムが言語教育の枠を超えて社会や文化を直接教授する教育の領域にその範囲を拡大することが必要である。このような考え方につき Widdowson は次のように述べている。

We can teach text recognition and production in cultural isolation without reference to any particular uses of language. But discourse can only be taught in relation to actual are of use. Those areas of use which are immediately accessible to the language teacher and familiar to the language learner are those of other school subjects which, of their nature, must provide a systematic presentation of those conventions needed to convey the basic concepts and procedures of the subjects concerned.<sup>13)</sup>

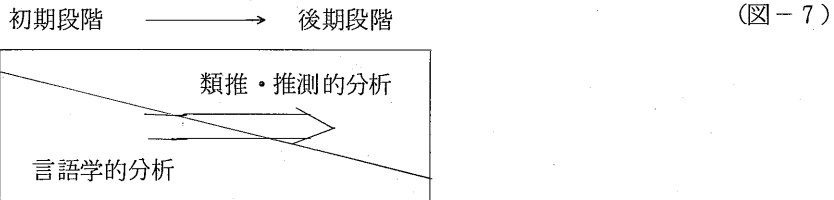
さまざまな学習や生活体験を通し体得した知識や経験の中には言語の種類や民族を問わず人間に共通したものが確かにありはするが、そうしたものは年齢や生活環境により限定されたものである場合が多い。外国語学習においては過去の経験や類似したコンテキストによる類推作用や推測作用が十分に期待できないほどコンテキストの共有、さらに生活環境の共有は望めない。したがって母国語話者なら当然把握できるはずのコンテキストの意味も理解に苦しむ状況にあるとするならば、言語表現を媒介としどこまで伝達上の価値の把握に近づけるかという問題は外国語教育においては重要な課題となる。

{ The baby cried.  
The mommy picked it up.

14)  
(8)

例文(8)で< the baby - it > の関係が第1文と第2文とのディスコース性を指す指標となっている。外国語としての英語教育で例文をあつかう場合、“it”が第1文の“the baby”を受けるという前方照応機能で説明をはじめることになる。それにより母親の行動をコンテキストを離れて把握する学習が優先される。これが第1段階の学習内容である。例文(8)の統合された意味、すなわち最終的な伝達上の価値に導かれる意味は学習者の年齢や生活経験、さらに例文(8)を包む社会的文化的状況などにより一義的とはならない。これを第2段階の学習内容とする。意味という視点に依ればそれぞれ第1次的意味と第2次的意味と規定できる。このような手順は英語学習においては十分妥当な方法である。

いっぽう< the baby - it > の関係を把握し2文の統合の意味を導くものは前方照応というような文法機能に頼りディスコースとして把握するのではなく、類推作用と限定した解釈の原則という2つの手順により読み手は第2文が第1文の説明に続く連続した内容の文であると理解するという説明も成立する。しかし少なくとももすでに考察したように言語表現からディスコースを把握するまでの過程において、第1段階は言語表現の分析から第1次的意味を把握するという学習段階を設定することが必要である。学習がかなり進んだ外国語学習者の場合には前述の意味理解の中間的な位置にあるといえる。したがって外国語学習の意味理解の段階は次のように図示できよう。



以上の考察から外国語教育を通して学習者は価値観や価値意識を身につける方法を学ぶことができる。ディスコース特定の手順は言語表現に固有の伝達上の価値を把握することを学ぶ過程において、学習者個人が独自の価値体系を形成することができるという点、および母国語と外国語を媒介として相対的な価値観の認識と形成を可能にするという2点にその意義と価値を認めることができる。

#### まとめ

本稿ではディスコースを伝達行動の中心的機能をとらえ、その根底にある伝達上の価値について

て考察した。また伝達行動の代表的な行動形態である言語行動に視点を置く外国語教育においては、伝達行動に至る過程に人間の思考のパターンとその表出手順を把握する方法が教授学習の中心的課題となるという仮説の可能性にふれた。教育内容の質の検討と合わせて、外国語に係わる伝達行動の過程の究明が外国語教育における課題であるということを確認したい。

〔注〕

- 1) Winifred Crombie (1985) Discourse and Language Learning. A Relational Approach to Syllabus Design Oxford University Press pp. 57
- 2) 上掲書 pp. 57
- 3) Young, R., A. Becker and K. Pike (1970) Rhetoric : Discovery and Change New York, Harcourt, Brace & World
- 4) この説明は Gillian Brown, George Yule (1983) Discourse Analysis Cambridge University Press pp. 206 を参照した。
- 5) 上掲書 4) pp. 200
- 6) 上掲書 4) pp. 200
- 7) 上掲書 1)
- 8) この "that" は例文の引用前の部分でナナ・バスコンセロスがアメリカのマスコミによる芸術の "製造化" に批判的な態度をとり仲間の音楽家たちと一線を画していたことを指す。
- 9) 上掲書 1) pp. 70 の例文
- 10) 上掲書 4) pp. 58
- 11) 上掲書 4) pp. 65
- 12) H. G. Widdowson (1978) Teaching Language as Communication Oxford University Press
- 13) 上掲書 12) pp. 54
- 14) 上掲書 4) pp. 60 の例文
- 15) 上掲書 4) pp. 60